

ゼロの使い魔 タイタンフォールスタンバイ！

一般クソザコパイロット

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『プロトコル1、パイロットとのニューラルリンクの接続』

『プロトコル2、任務の執行』

『プロトコル3……パイロットの保護』

目次

m i s s i o n 2	追従	6
m i s s i o n 1	無機質で何処か人間くさい使い魔	1

mission 無機質で何処か人間くさい使い
魔

『プロトコル3、パイロットの保護』

プロトコル2、惑星タイフォンのフォールドウエポンの破壊任務、
プロトコル3、パイロットの保護、双方のプロトコルの遂行が可能な
選択肢を発見。前方ハッチを開きます。

「何をするBT!」

『……信じて!』

「BT……!!」

プロトコルの遂行、完了。……さよなら、ジャック。

直後、BT-7274のシグナルロストが確認され、フォールド
ウエポンは爆散。一機の何処か人間くさいタイタンの犠牲によって、
宇宙は救われたのだ。

ここはトリステイン魔法学院。

空は蒼く、何処までも高く。

白い雲は風に乗って流れ。

一つの太陽は豊かな緑が生い茂る草原を温かく照らしていた。
その中心には黒いマントを着けた集団がいた。

1人を除いてその全てが10代の少年少女である。

今まで自分が出した中でも一際大きな爆発音が草原に響き渡った。

「なんだ、また失敗か？」

「いい加減にしろよな」

「さすがはゼロのルイズだ！」

その爆発音を聞いて、周りからそんな中傷が飛んでくるがルイズは無視した。

ただ、煙が晴れるのをじっと待った。

(ドラゴンとかグリフォンとかユニコーンみたいな贅沢は言いません。始祖ブリミルよ、私に立派な使い魔をお与え下さい!!)

煙が晴れた先に見えたのは、火花を時々上げているゴーレムであった。

「コルベール先生、これは一体なんなのでしょうか？」

ルイズの目の前には巨大なゴーレムが横たわっている。しばらく観察してみても動く気配がないところを見るとこれは生物ではないのであろうか。自身では明確な解答が判然としないため、彼女は引率担当教官であるコルベールに尋ねてみた。

「……随分と巨大ですが、これは見たところゴーレムのようですね。しかし、これほどまでに精緻で精巧なゴーレムは見たことが無い……。しかも、未知の物体で構成されている部分がある!! 凄い! 凄いですぞ!! ミス・ヴァリエール! さあ契約を」

俄に興奮しだしたコルベールとは対称的にルイズは己の顔に落胆の色を張り付けていた。動かず生き物ですらないこんな物体をどうやって使い魔にしろというのか、ルイズは唇を噛みしめると目の前に横たわっているゴーレムの顔にあたる部分によじ登り呪文を唱えた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。」

五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ。」

コントラクト・サーヴァントの呪文を紡ぐとゴーレムの顔と思わしき四角い部分に軽く口づけを交わす。ルイズはゴーレムの無機質な姿にやや気圧されながらも契約をこなした。すると、ゴーレムが起き上がって周囲を見回す。

『……大気の組成の変化を検知。データベース内のどの惑星とも一致しません。……仮説1、アークの爆発の余波による転移。……不可能。アーク単体での転送は出来ません。……仮説2、フォールドウエポンによる誤転送。……不可能。爆発直前までフォールドウエポンは転送機能を起動していませんでした……プロトコル2、プロトコル3に基づくパイロットの保護、及び任務の遂行とします。……パイロットとの連絡失敗。検証……原因はシグナルロストによるものと推測。……本部との連絡……失敗。現地でのパイロットとのニューラルリンクを模索。……第1候補、ルイズ・フランソワーズ・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。貴女とのニューラルリンクを開始します。搭乘してください』

プシューッと空気が抜ける音がして、ゴーレムの中の空洞が顕になる。ルイズは恐る恐る中に乗ると、急速にハッチが閉まり、ルイズを閉じ込める。ルイズは出ようとするが、内部に何故か取り付けられていたヘルメットを被るようにBTに促されて渋々と被る。

「ちよ、ちよつと出さないよー」

『プロトコル1、パイロットとのニューラルリンク……ニューラルリンク完了。視点を共有します』

ニューラルリンクが終わった瞬間、ルイズはBTとの情報が共有され、前方にBT視点の画面が映し出される。

「……何かしら、これ……」

『プロトコル2、任務の執行。……現状の任務は存在しません』

『……プロトコル3、パイロットの保護。貴女は私が守ります、パイロット』

「…変わった使い魔ね……あと、私のことはパイロットじゃなくて、ルイズ様と呼びなさい！」

『了解、ルイズ様』

使い魔召喚の翌日、ルイズは自身の部屋のベッドの上で目覚めると大きく伸びをする、

窓から差し込む明るい日差しが、よく晴れた朝だということ教えられていた、

ルイズはまだ半分寝ている頭を振りながらも日頃の習慣に従い、学院の制服に着替え、先日使い魔の内部にあった装備を取り出す。

その様子は寝起きにも関わらず、悩んでいるかのようなだった。

自身の身支度を済ませると朝食の時間が近づいていることに気づき、部屋の扉に手をかけた、

ルイズが朝食を食べるために部屋の扉を開ける、

すると隣の部屋からも人が出てきたことを確認した、

「おはよう。ルイズ」

燃えるように赤い髪が印象的な少女がそこにはいた、

褐色の肌をした豊満な肉体、そしてほりの深い整った顔立ちは美しいと多くの人が感じずにはいられない、

大きな胸を強調するようにしてブラウスのボタンを幾つも外しているその姿はやや過剰なほどの色気を周囲に振りまいている。

「おはよう。キュルケ」

かけられた声に気づいたルイズは少女のほうを向き挨拶を返す。

その顔はやや不機嫌そうな色に染まっていた。

声をかけてきた少女の名はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。

トリステイン王国の隣国、帝政ゲルマニアの伯爵令嬢である。

またツエルプストー家はルイズの実家であるヴァリエール公爵領と国境を挟んで向こう側にある。

しかし、両家の間には因縁深い事件が多く二人は犬猿の仲にあつた。

またルイズはキュルケのプロポーションを少々妬んでいる事もあ

り特に仲が悪い。

もつとも、その面白い反応からキュルケはルイズをからかう事はあれど悪い感情を持っていてどうかまでは分からないが。

ルイズはキュルケに尋ねた。

「昨日はどうだったのよ、使い魔召喚」

「私は一発で成功よ、しかもね……フレイムー、おいでー」

ルイズの問いに答えるようにキュルケは話を進めた。

キュルケの部屋から呼び出したのは深紅の皮膚をもったトカゲだった。

背は1メートルほどもあり、その大きな体を支える四つの足は力強く、太かった、尾の先からは揺らめく様にして炎が踊っている、

「見て、立派なサラマンダーでしょう！ この見事な尻尾の炎、ここまですっきりと大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ。好事家に見せたら値段なんかつかないわ！」

「……そう」

「？」

キュルケは拍子抜けしたように首をかしげる。

いつものルイズであれば悔しがるなど何らかの反応が見られるはずだが、いまのルイズからはそのような様子は欠片も見られない。

寧ろ、どう答えるべきか迷っているかのようなようであった。

そこに、件の使い魔から通信が入る。

『ルイズ様、おはようございます。アルヴィーズの食堂までの最短ルートをナビしました。アルヴィーズの食堂にて、待機状態でお待ちしております』

スピーカーで発された使い魔の音声に、キュルケの目が大きく見開かれ、驚愕の表情を作り出す。

「……アンタ、もしかして喋るゴーレムを召喚したの!？」

「え、ええ……BTって言うらしいんだけど……ゴーレム図鑑には似たような形のゴーレムすらいなかったの」

「へえ……つまり、最近作られたゴーレムか、大昔のゴーレムって事

？」

「さあ……？ ……つて、窓を突き破るようなルートが用意されてる……いつもの道で進むか……」

「？」

ルイズは首を傾げながら頭^へ全体を覆^{メツ}う兜^トを被り、しばらくするとまた外し、普通に食堂へ歩いていった。

そこは、食堂とは言えとても華やかな作りが施されたいかにも貴族趣味、といった建物である

中も豪華絢爛という言葉がぴったり当てはまるほどの内装が施されていた、

中には百人はゆうに座る事ができるテーブルが幾つか並んでいた、学年別に分かれているらしく、ルイズは二年生所定の真中のテーブルへと進み、自分の席へと着席すると朝食を食べ始める。

すると、使い魔が外から覗いてきた。

『ルイズ様、次の授業に遅れないように。食事が終了したのならお乗り下さい』

「ちようど食べ終わったところよ。ほら、乗せなさい」

『了解。パイロットによる手動操作に移行します』

使い魔は優しくルイズの胴体を握り、コックピットに入れて、ルイズに操縦権を与える。

「全く、BTはもう少し穏やかに出来ないのかしら？……私、変な使い魔を召喚しちゃったかも……」

『皮肉を検知』

『到着しました。オートタイタンモードに移行します』

教室に到着すると、BTがコックピットの扉を開けて使い魔のいる場所へ座る。

教室で待機していると他の生徒も自らの使い魔を引き連れてやってきた。教室には様々な使い魔がいる、フクロウにキュルケのサラ

マANDAー、モグラなど十人十色多種多様だ、ただしひととき異彩を放っているルイズの使い魔・BTを皆が警戒しているという共通点を除いては、だが、

教壇に中年の女が現れた、おそらく教師なのだろう、一旦教室が静かになる

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。この赤土のシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、皆様が召喚した様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみにしているのですよ」

その言葉にルイズが俯く。シュヴルーズと言う女性がBTを見つめてルイズに話しかける。

「おやおや、変わった使い魔を召喚しましたね？ ミス・ヴァリエール」

とぼけた声でシュヴルーズが言うと、教室中がどつと笑いに包まれた。

「先生！ ルイズの召喚したのは生き物ですらありません！」

「しかもゴーレムです！ どうせ他のメイジからゴーレムを借りて連れてきたんだろ？」

「ちよつと！ 私はちゃんとBTをサモン・サーヴァントで召喚したわよー！」

「嘘つくな！ そんな事言ってるけど、本当は『サモン・サーヴァント』が出来なかったんだろ？」

ゲラゲラと笑い声が響き渡る。

「ミセス・シュヴルーズ！ 侮辱されました！ 『風邪つぴき』のマリコルヌが私を侮辱しました！」

握り締めた拳でルイズが机を叩いた。ダンツ、と少し小さな音がした。

「俺は『風上』のマリコルヌだ！ 風邪なんか引いてないぞ！」

「あんた、自分のガラガラ声聞いた事ないの？ 馬鹿は風邪を引かないと言うけど、あなたの場合は風邪を引いているのに気付かないだけなのかしら!？」

マリコルヌと呼ばれた少し太つちよの男子生徒が立ち上がりルイ

ズを睨みつける。シユヴルーズが手に持った小ぶりの杖を振ると、立ち上がっていた二人が突然ストンと席に座り込んだ。

「ミス・ヴァリエール、ミスタ・マリコルヌ、みつともない口論はお止めなさい」

というシユヴルーズの言葉とともに目の前に現れた赤土に仲良く口を満たされていた。